

寛永通寶の中國流通について

川久保 悌郎

我が中世以降近世にかけて貨幣経済の発達に伴い外国錢たる中国の宋錢及明錢（永樂通寶）が大いに流入し主要な通貨として行使されていたことは、周知の通りである。このことが餘りにも顯著なためか、逆に我が国の銅錢が海外へ流出した事實については、その史的意義如何は姑く措くとしても、従来案外関心に上りなかつた點が有つた。なもこの問題に注意を向け考察を試みたものが全然なかつたわけではない。例えば、既に岩生成一博士は「江戸時代に於ける銅錢の海外輸出について」(『史學雜誌』)なる論文に於いてこの問題をとり上げられている。同博士は日中兩史料の外、博士の最も得意とするオランダ側の史料を駆使されて我が對外貿易を軸とし廣く東亞の國際貿易の

脈を考慮に入れつゝ、我が銅錢が琉球及び印度支那方面に輸出され、彼地に於いて流通した事實とその経緯を實證され、その結論として「（上略）江戸時代初期我が経済圏は異常に膨脹し遂に南洋にまで及んだ。永く前代より蓄積された銅錢は、此の擴大した我が経済圏内各地に流動した。或は通貨其の物として、或は鑄造原料として廣く海外市場の需要を充した。其の後海外渡航杜絶せしめ、その墮勢と海外市場の強き欲求は依然として我が銅錢の輸出を促した。我が豊富なる銅鑄と鑄造技術の進歩は能く其需要に應じ終に江戸時代末期に及んだ様である。」と述べている。これを以てしても、我が国と交通・貿易上最も密接な向柄に在り、しかも日本銅を多額に輸入した中国について

この事實が現出されない筈がなからう。果して「清国通商條約」(明治二十三年日)の編者は、清朝時代の銅錢を詳説した條で、我が寛永通寶の行われたことを指摘して居り(同書第一編第二章第二部)、また(明治二十三年日)の編者は、清國行政法(明治二十三年)の編者も清代中國に流通した錢の種類を挙げて條で外國錢に言及し、「日本銅錢等」錢も亦輸入せられ銅錢に混じり流通し(寛永の錢種)「永通寶」如半銀モダク之ヲ用ルト云フ(同書第三章貨幣及錢)と記している。最早我が寛永通寶の中國流通は寛永を容れないところであるが、兩書とも文献上の證據については何等有るところがない。岩生博士が前記論文に於いて當條論及されてゐる可きであつた中國について最て頼れようとなされなかつたのも、或はこれを證するに足る具體的史料の乏しいためではなからうか。

さて最近世の目的で「天清寶錄」を渉獵中、偶々我が寛永通寶が中國の一部に可成り流通していたことを示す一節に邂逅したので、それをここに紹介することとする。固より「天清寶錄」は清代

史研究上必須の根本資料であり、また右の一節はよりボビュラ一は文献である「東華總錄」にも載せられてゐるから、恐らく既に長く知られてゐる所であろう。然し、この中國の資料に接する機会が比較的少ないと思われ、因史関係の方々に何等かの参考ともなれれば幸である。

即ちその一節と云うのは、天清寶錄高宗卷四一六、乾隆十七年七月甲申の條に

又諭、(一)向開通地方、有行使寬永錢之處。乾隆十四年曾發方親至該處查察、既以現在制錢昂貴、未令深究、且以爲不過列市井間、竊近抄板之類、仍屬本朝名號耳、乃近日漸覺搜獲賊犯、海案一案、又聞行使寬永錢之語、意係寬永通寶字樣、夫制錢國寶、且銅紀年毫無差謬、即或私鑄小錢、攪雜行使、其罪止於私鑄、若別有寬永通寶錢之、則其由來不可不嚴爲查究、(二)又南江、以南來市鹽、行使者多、每銀一兩所易制錢四、此項錢文、與中央、錢鑄式無異、又入市行使、則必同鑄幣之過、無難查察、當請嚴加查辦、並有諭令戶部、嚴密查辦、既經具奏、所聞

海濱郡縣。一併令該督撫等密行查辦。下可因從前之失於查察。遂爾稍存因護。並宜鎮靜辦理。勿令胥役人等借端滋擾。聲張多事。(1)尋尹繼善莊有恭等奏。懇永錢文。乃聚洋後地所鑄。由內地商船帶回。江蘇之上海浙江之寧波乍浦等海口。行使最多。(2)查乾隆五十九年。原任檢討朱軾等奏內。載有恭妻錢一書。有乾隆三十四年。又原任徐謙等中山傳信錄內載市中皆行寬永通寶。是此錢皆出外洋。並非內地有開鑄錢文之處。但既係外國錢文。下應據和行使。(3)臣等現據沿海各屬會。嚴禁商船私帶入口。其零星散佈者。官爲收買。商局之錢。報銷。

とあるのがこれである。この上議は稍々長文に互るから、記號を插入しておいたように、内容上これを(A)(B)(C)の三つの段落に區切り、更に(1)段は(1)(2)(3)の小段落に分けて説明を加えよう。(A)段の大意を上げれば、向きに瀟海の地方で寛永錢を行使している處があるに聞き及んだことがあり、まづ乾隆十四年には万親承がこれを查禁するよう奏請したことがあり、だが、朕は現在制錢が騰貴している

故未だ深く追究せしめないでいる。のみならず民間で云われているところの瀟沙板の錢の如きは、本朝名の錢貨についてだけのこと、餘り竟に介しなかつた次第であるのに、近日浙江省で搜獲した賊犯海震の審理案件中にも寛永通寶行使云々の語が見えてくる。制錢は國幣であつて紀年、年號を鑄てあり、小錢を私鑄してこれと混之使う者亦あつてもその罪は私鑄律にあたるに止まるが、若し別に寛永通寶なる錢文があるとするならば、それは寧ろ置けないことだ、その來源を嚴重に調査追究しなければならぬ、と云うに在る。これによれば、少くとも乾隆十七年以前から寛永通寶なる錢文が浙江省方面の海濱地方に於いて用いられていたことが判明する。次ぎの(B)段は、由くところによると、この種の錢が江蘇以南の地方の米市、塩場の取引に最も多く行使され、銀一兩に易えられる制錢中その殆んど半ばを占めている由だと云い、尹繼善、莊有恭等に命じてその末歴を徹查報告せしめると共に、浙江、福建の瀟海の諸郡縣に關しては當該督撫をして密かに檢察を行わしめた

ことを物語り、これによりて江南地方の米・塩の市場に我が寛永通寶が制錢に混つて相當量流通していたことが確の得られる。更にの段々には、の段にある通り尹壯善、莊南泰等が命により寛永通寶の乘厯調査に当り、その結果を報告したもので、それが東洋の倭地印ち我が國の錢錢で、内地商船のまり中國船によつて持方運ばれて来たものであること、且つそれが江蘇の上海、浙江の寧波、乍浦等の港口で最も多く使用されていることも明かにしている。(2)は尹、莊兩人等の寛永通寶についての説話で、謂わは中國側の「寛永」なる日本年號に關する考證とも云うべきであらう。この部分は當時に於ける中國官寮の我が國についての智識、程度の一斑を窺わしめるものとして少なからず興味を唆るものがある。こゝに引合ひに出されている朱彝尊(一六二九—一七〇九)は、云うまでもなく清代に於ける著名な學者、文人の一人で、その著書には曝書亭集八十卷、日下舊聞四十二卷其他多くの詩文案の類がある。こゝに云う寛永三年の序のある「言要錄」はその中に載せられていると云

うのは、恐らくは曝書亭集のことかと思うが、未だこれを確める機会を持たないでいる。次ぎに擧げられてゐる徐葆光の「中山傳信錄」は、人も知る明清時代の琉球事情に關する好史料であつて、康熙五十七年に琉球國王世子尚貞が國王に冊封された際、徐自身が冊封副使として彼の地へ赴き親しく見聞したところを録してゐる。この書には、この條で言及されているように、琉球の市中では我が寛永通寶が専ら流通して日幣の用を足していたことを記して

市中交易、用錢無銀。錢無輪廓。向有舊錢。如鵝眼大應變。或有成武字已絕少。(中略)其平日皆用寛永通寶錢。錢背無字。或有一文字。按歲在壬戌。此日本舊錢也。錢模大小永樂前明萬曆錢相仿。錢邊皆有日。每百通國銀一錢二分。同國銀五十者一兩也。(下略)

とある。琉球に寛永通寶が流通していたことについて、岩生博士が前記論文で同じくこの條を引用して論證されたところでもあり、本題からも離れるから、これ以上立ち入らない。云に反つて最後に引かれは、加ふる状況に鑑み沿海諸地方の

各官員に命じて商船が私かに寛永通寶を船載して海口に入るのを嚴禁せしめると共に、既に處々に散布してしまつたものは、当局がこれを收買して集め、鼓局（造幣局）に送り鑄錢の原料に充てるよう處置を講ずることとしたことと判明する。

以上こゝに紹介した上諭は、我が寛永通寶が少くとも清代乾隆前期に於いて中國の江蘇、浙江、福建等の沿海諸省の一部に流通していた證據のあること、殊に對日貿易の要津であつた上海、寧波、乍浦等の海口附近の地方では、その流通量の決して少ないものでなかつたことも證しているわけである。本稿の目的は、要するにかゝる事實の存在を指摘するにとゞまるが、こうした事實の由つて來つた事情について何等かの手掛りが得られないであらうが、たとへ得られないにしても、その背景を考へて見ることは無益でないと思われる。蛇足ながら一、二の考察を加へ、併せて大方の御教示を仰ぐこととする。

改めて断るまでもないが、寛永通寶は前代より流通久しかつた明錢に代つたところの、我が江戸

時代の代表的錢貨で寛永十三年（一六三六）始めて鑄られ、その後幾度かの改鑄を経て明和年間（一七六四—一七七一）に反んでいる。その時期は中國で云へば明末の崇禎九年から略々清朝の乾隆中葉に至る間に當る。この間中國にあつては明清の交替があり、その混亂期を経て新政權清朝による諸施策が漸々確に就いて行つたが、清朝の基礎が確立するのは、矢張り台湾の鄭氏の覆滅と三藩の亂の平定を以てであり、爾後國勢は上昇線を辿ることとなる。清朝に抵抗しつゝ、海賊勢力として東南支那海上に猛威を振つた鄭氏の動きは、當時に於ける東亞の國際貿易に少なからず變動を與へたのみならず、鄭氏に對する制馭策としてとられた順治十二年（一六五五）（一六五五）よりする漁業、同十八年（一六六一）（一六六一）の遼東令の實施は、日中相互の貿易に影響を下には措かなかつたであらう。一方我が國に於いては對外政策の著るしい轉換があり、爾後の對外貿易關係の方向が決定づけられたことは周知の通りである。即ち寛永通寶の周鑄に先立つの三年前の寛永十年（一六三三）には朱印船以外

の邦人船の海外渡航禁止、同十二年には邦人の海外渡航と異國居住邦人の歸國禁止及び支那船の長崎以外入港禁止、更に同十六年（一六三九）のポルトガル人の來航禁止に及び、同十八年（一六四一）には長崎を以て我が國唯一の貿易港となすに至り、こゝに一連の所謂鎖國令が實施を見た。嗣後に於ける長崎一港を窓口とする對オランダ貿易と對清貿易の動向とその推移とは、とりわけ後者のそれは、後で觸れる中國の事情と相俟つて本稿テーマの背景をなすところの客觀的條件と云つてよからう。

ところで、我が對清貿易は、主として金銀及び銅の金屬類を輸出し、中國の主絲、絹織物を輸入することによつて營まれ、輸入超過の片貿易であつたから、勢い多量の金銀の流出を招いた。金銀の流出が國家財政上、國民經濟上問題化するに至るのは必至であつた。金銀の流出防止の同題と結んで主要輸入品生絲に關する絲割符制の廢止（一六五元）^{（一六五元）}、銀輸出の禁（一六六八）^{（一六六八年）}、或はまた市法賣買の制定（一六七一）^{（一六七一年）}、貞享二年（一六八五）の絲割符制の復活と市法賣買の廢止等々迂餘曲折

を経つ、長崎貿易は次第に制限されて行き、遂に新井白石の立案に係かる正徳五年（一七一五）^{（一七一五年）}の長崎貿易新令に至つてその制限は一層強化された。金銀の流出と並んで銅の海外輸出も亦著るしい現象で、對清貿易上に於ける日本銅輸出の消長如何の向題は、特に本稿に直接繋がる重要事項だけに不向に附するわけには行かない。幸いこの點については、同じく岩生博士の論文「近世日支貿易に關する數量的考察」^{（「史學雜誌」六二ノ一）}に精細克明な記述があり、例之は「長崎來航支那船出帆地別數表」、「長崎來航支那船輸出銅數量表」等の表に見る如く、その實態は可成り明かである。

それでは中國で日本銅を需要したのは、如何なる事情に基くのであらうか、後述する如く、その一半の理由は鑄錢原料を日本銅に仰いだからである。従つて日本銅の需給關係は中國當時の貨幣事情、通貨の流通狀態と直接相接の關係を持つこととなる。併し中國のような廣地域に於ける、しかも複雜極まる經濟事象の下に於いて通貨事情の如きは、晴折により絶えざる變動にさらされており、諸要因の絡み合ひであるから、一因を以て直ちに

他を推すことは出来ない。それ故、我が寛永通寶が中國に於いて局地的にしろ行使されたその事情を追究して見ても結局結論は出ないのであるうし、またその方法についてもきめ手のない問題と云わざるを得ない。たゞこゝでは寛永通寶が流通していたという確證のある乾隆前期頃を一度の目安として、これは先立つ時期の中國の通貨事情を聊か窺つて見よう。

頗る大まかな推測ではあるが、清朝初期に於ける制錢（法定銅錢）の流通状態は円滑を欠いていた模様で、その銑造額、従つてまたその流通量は、その教的な詮索は兎も角として、需要に應じない傾向に在り、錢價の騰貴を來たしていたようである。康熙十八年（一六七九）の上諭には「今面錢法漸弛。鼓鑄收銅等項。滋生弊端以致制錢日少。價值騰貴。」と云い、戸部、工部、都察院堂官に命じて弊端除去の方策を議せしめたが、それに續けて「（上略）至於部院衙門各處所有廢銅器皿毀銅鐘及廢紅衣大小銅礮并直隸各省所存廢紅衣大小銅礮。著盡行確實。解部鼓鑄。」（十朝聖訓聖祖卷二十七）とある。これによれば、當時に於ける錢價の騰貴

は、こゝに指摘されているような錢法の廢弛に帰せられる面もあるうが、制錢の不足、その一因としての鑄造原料銅の不足に基かないとは斷言出来ない。元來錢の價格は、その需要供給の關係によつてのみならず、銅價の高低並びにその銀との關係等によつて變動するから、たとえ錢の供給が時の需要に見合うものであつても、錢價と銅價との向に不均衡が生じた場合、例えば錢價に比して銅價高の場合には、射利の徒による私鑄、私燬の不法行爲や奸商による囤積が行われて制錢は流通面から姿を消すに至るであらうし、これによつて需給關係は不均衡に陥り、錢價の騰貴を招くことになる。こゝに錢價と銅價との不調和を調節して錢價の平衡を維持する處置が必要となつてくるわけだ、康熙二十三年（一六八四）には、管理錢法吏部左侍郎陳廷敬の議に依り、錢の重量を每文一錢に減じ（當時は每文一錢四分、國初は一錢二分）、價格の平減を期し、併せて私鑄、私燬を防止しようとしている。これは貨幣政策の定石には相違ないが、私鑄の利なきところは私鑄の利あるところであるから、やがて反動が起つて私鑄が紛々

して行われ、制錢、私錢相混じて流通するの事態を誘発し、錢價の低落を來たしたようである。康熙四十五年（一七〇六）四月には、大學士等は戶部と會議して「今錢價甚賤。不便於民。奉有諭旨應暫動支戶部庫銀十萬兩。由戶部差官金同五城御史收買舊制錢。俟錢價既長奏聞」（十朝聖訓聖祖卷二十一）と上申し、これに對する上諭には「錢價賤者。皆私錢多之故也。」「（下略）」（同上）とあり、これと同縣のある同年七月辛酉の戶部侍郎穆旦の報告には「差官收買制錢。天津臨清地方錢價已長。但五城民人行用之錢僅和私錢者。尚多。」「（下略）」（同上）の語が見え、先きに錢價の高騰を抑え、その低落するや、またその増長を圖つた消息が窺われる。然るに康熙五十年代から雍正を経て乾隆中葉に及ぶ向の上疎及び官像の委請の類には、「錢少價昂」を請え、その理由として制錢の私銷、私熾、或はまたその直接原因たる銅價の騰貴について言及しているものが多い。例えは、康熙五十六年（一七一七）六月己亥には、大學士、九卿等が會議して民向で制錢を私熾して銅となし轉賣する者あるを嚴禁すべしと答申し、これに對する上

諭には、「煥壞制錢。原有明禁。待田銅少價昂。部內鑄錢不敷採買廢銅以致小民射利熾小制錢。作廢銅變賣。」「（下略）」（十朝聖訓聖祖卷二十一）とあり、同六十一年九月戊子の上諭も京師の錢價の甚だ貴いことと述べた中で、「（上略）」銅帥少則鼓鑄缺。鼓鑄慢則錢自貴。」「（下略）」（同上）と云い、更に雍正十三年十一月癸丑の上諭にも「國家設法向小民日用之需。必使流通裕。而無定用阜民。以爲平鼓鑄而錢下如也。京師之中庸縣錢文甚少。此等奸徒暗行銷壞之故也。」「（下略）」（十朝聖訓高宗卷一）と見えていて、それでは康熙末年に於ける錢價の高騰の一誘因ともなつた銅價の高値は、一件内に帰因するであらうか。

こゝで豫つて清朝の設局に於ける鑄錢原料銅の採買と調達は如何に行われたかを一瞥するに、國初に於いては、蒙文門、天津、臨清、淮安、蕪湖、揚州、清野、九江、兗州、西河等の錢糧局をしてその稅銀を以て民向の廢銅、舊器を回收して中央の設局（工部の鑄泉局）に解送せしめるのが常であつたが、康熙五十四年（一七一五）に至つてこの方法を改め、江蘇、安徽、江西、福建、浙江、

湖北、湖南、廣東の八省の省換をして正項を動支して毎年四百萬圓を採買せしめることゝなした。次いで同六十年には八省分擔調達の方式を改め、江蘇、浙江兩省にこれを請け買わせ、洋銅即ち日本銅の採買を行わしめたが、洋銅足らず賤もよくして云の方式に復した。固より中國は鋼產國ではなく、自國產のみを以ては鑄造原料銅を賄ふことが出来なかつた。これが日本銅に對する需要の極めて旺盛であつた事情に外ならず、我が長崎の制鋼貿易を通じ、或はまた非合法の密貿易により日本銅が多量に運出された所以なのである。前出の岩生博士作成の「支那船輸出銅數量表」によれば、延寶二年（一六七四清）から貞享元年（一六八四清、康熙）に至る十一年間の支那船輸出銅は、天和元年（一六八一）及び同二年時の例外を除けば、毎年二百萬斤を割り、船隻數も亦二、三十隻にとゞまり、貞享二年以降のそれに比すれば大差がある。延寶二年より前の状態は同表にないので知る由もないが、恐らくこの約十年間の状態を測つて考えて太過あるまいと思う。我が貞享元年は中國ではその前年台灣の鄭氏が滅亡し、前述の海

禁が解除された年に當る。この年を境としてその前後の支那船輸出銅の數量に著るしい差が見られるのは、決して偶然でないと言けられる。因みに上述の如く康熙前期に鉄價高騰の傾向が持續したのは、寧給圖隊のアンペレンスなど種々の原因が芳ろうが、その一因は鋼の一般的高價に歸せられると思ふし、このことは日本銅の輸入が阻害されてゐたことに關係があるまいか。或る程、この年以降日本銅の輸入は、表にも現れてゐるように、従前に比して増加してゐるに相違ないが、前に觸れた如く、我が長崎貿易は逐年制限されて行く一方であつたから、中國が日本銅に依存するにしても自ら限度があり、愈々拡大する需要が満たされたとは限らないのである。我が正徳の長崎貿易新令實施直後に當る康熙末年の鋼價高騰は、その反映と解せられないであらうか。

それはそれとしても、勿論中國自國產の銅がなかつたわけではない。中國で銅鑛資源の豊富であつたのは、垂南支那、中雲南省の方面でありて、清初この方面に據つた吳藩（吳三桂）の時代、その手で銅鑛の開採、鑄錢も行われたこともあるが、

本格的な採銅に着手されたのは、矢張り清朝が安
 藩の反亂を平定し、この方面の開闢が進んでから
 である。雲南の銅鑛業が隆盛に赴くのは、雍正・
 乾隆の交からであつて、その顛末は最近出た最中
 平編著の『清代雲南銅政考』に詳しいのでそれに
 譲るが、果して乾隆元年（一七三六）には京局（
 寶泉局）用銅廿總額四百萬斤の中、一半は雲南よ
 り他の一半は日本より採買することゝ定め、江蘇・
 浙江兩省の商人を派して日本銅を購入させたが、
 動もすれば總額を欠くこともあつたので、同三年
 には少くとも京局用のものは悉く雲南から調達す
 ることに改められてゐる。かくの如く雲南銅即ち
 滇銅に依存するようになったのは、滇銅の産額が
 上がり、これを可能ならしめるに至つたに外なら
 ないが、滇銅の陶産と増産を促したものは、我が
 貿易制限の弛化に基く日本銅輸入の臨路と云つて
 よい。それは兎も角として、乾隆年間には既に
 中國產の滇銅の出廻りと、従来からの洋銅即ち輸
 入日本銅を勘合して、銅の供給は以前に比べて潤澤
 になつたものと推測されるが、果して需要に追いつ
 いて行けたかどうか疑問である。また滇銅の生

産原價も問題であらうし、少くとも乾隆前期に於
 いてはまた銅價高の空氣が溜洩せず、錢價も亦銀
 一兩錢八百三十文乃至八百五十文位のところを上
 下し、特に急落した様子がない。従つて制錢の流
 通状態が良好であつたことは決して考えられないし、
 民向もこれを不便とする向きもあつたろう。寛永
 通寶が中國と流通を見たのは、以上考察した中國
 の貨幣事情と無縁でない筈であり、當時に於ける
 中國制錢との品位の比較も亦重要事項として検討
 を要するが、他日を期することとする。（三四・五）

主な参考文献（文中引用のものを除く）

皇朝文獻通考卷一三十一、錢幣考

皇朝通典卷一〇、食貨一〇、錢幣

皇朝文獻通考卷二一四、錢法

清史稿、食貨志五、錢法

小栗田浮編「近世社會」（新日本史大系第四卷）

「寛永通寶」の研究（昭和三十三年）

「寛永通寶」の研究（昭和三十三年）

「寛永通寶」の研究（昭和三十三年）

「寛永通寶」の研究（昭和三十三年）